

(金のエンジェル賞 中学生の部)

蜘蛛

中二・星 結以那

「う、ん……」

最初に目に入ったのは、学校の廊下の天井だった。僕は確か、昼休みに遊ぶため急いで階段をおりていたら、十段もあろうところから転がりおちたのだ。頭がズキズキする。そのせいか、やけに天井が遠く感じる。先に行った梅田には悪いが、さすがに今日はサッカ―は諦めて大人しく保健室で休もう。まずは梅田に伝えよう、とゆっくり起き上がろうとして、手足に違和感を感じた。なんだか、動かしづらいというか、感覚が変なのだ。

落ちた時に変に打ったのだろうか。片手を持ち上げて様子を見てみようとする――。「血とか出てないよね――ってうわあ!?!」

僕の視界に入ったのは、日に焼けた腕でも、痣だらけの腕でもなく、黒くて細長い「節」のある腕だった。

――クモだ!!

ギョツとした。何故なら、その腕は普通のクモではありえないくらい大きかったのだ。そう、例えるなら人の腕くらい。

上手く動かせない手足を駆使して、四つん這いでズリズリとその場から離れる。

やけに周りが大きく見える変な目で、辺りを見回す。ところが、巨大クモの姿はどこにも見つからなかった。ぽかんとしつつも、もう一度ゆっくり、しっかり見回す。いない。

幻覚が見える程本格的におかしくなったのかと危惧しながらも、そんな化け物がいなかったことに心底安心し、ふーっと息を吐く。その拍子にゆらっと目の端で何かが動いた気がしてぱっと目で追いかける。

——突然だけど、僕の学校には廊下に大きな姿見があるんだ。身だしなみに気をつけている先輩方のたまり場だ。今は、不思議と人氣はなく鏡の前もがらんとしている。だから、当然真横にいる僕の体が映っているはずなんだ。映ってなくちゃいけないんだ。

なのに、当の鏡には僕の姿なんかなく、見えるのは、僕の体ほどの巨大なクモだけ——。

そこまで考えて、はっとして慌てて辺りを確認する。いない。しかし、鏡の中にはちゃんと先程と同じように巨大クモが佇んでいる。危険は無いようだ。作り物の様なそのクモに僕は、思わず手を伸ばしてしまった。

「っ!!」

僕が手を伸ばすと同時に、あいつも手を伸ばしてきた。焦って手を引っ込めるとあいつも、手を引っ込めた。

同じタイミングで、同じ動き。

まさか、信じられない。そんなことあるはずがない。でも、そうじゃなきゃ何だっていうんだ——。

試しに、手を再び前に突き出してみる。あいつも同じ動きをした。次に、手を左右に振ってみた。あいつも振り返ってきた。

——どうやら僕は、クモになったらしい。

やけに天井や廊下が広く感じたのは、僕が小さくなっていたからか。

キーンコーンカーンコーン……。五時間目を告げる鐘の音が響い

た。と、今までおかしいくらい静かだった廊下に、どたばたと三年生達がグラウンドから戻ってきた。未だ慣れぬその体を必死に動かして、踏み潰されない様に壁際に逃げる。これから、どうしよう。クモになってしまった今、行く宛なんかない。父さんも母さんも、梅田も先生だって、僕の事なんか分かるはずがない。だって、今僕は人でもないんだから。

それから、自分の二倍程の高さの階段を一段一段ゆっくり、確実に上っていった。一階から二階までの合計二十段を上りきったときには、もう六時間目が始まる頃だった。六限の数学について考えながら、長く冷たい廊下をおぼつかない足取りで進んでいく。

クモになってしまったあの昼休みから、僕が向かった先は僕の教室——二年C組だった。クラスの誰かが僕を僕だと分かってくれるかとも思っているのだろうか。

教室に入ってみると、今はどうやら、宿題の答え合わせをしているところだった。

いつもは退屈と思っていた授業のはずなのに、今は皆と一緒に授業を受けたくて仕方が無い。その寂しさから、僕の足は窓際が一番後ろ、つまり僕の席に自然と動いていった。

壁際を進めば見つからないだろう。そんなあまい推測をしてしまったせいで、僕の身に悲劇が降り注ぐことになる。

カサ：：カサ、カサカサ：：

「ん：：今何か目の端で動いた気が：：」

と、清水さんが振り返ってきた。僕と清水さんの視線が重なる。ま
ずい。

「ク、クモ：：い、いやあ——っ!!」

清水さんの叫び声でクラスの全員が振り返り、僕の姿を見つける。

「いや———!!」

まずい。このままじゃ殺されてしまう!!

急いで、その場を離れる。しかし、未だ慣れぬこの体では、速く動けない。前には、梅田がいる。もしかしたら、梅田が僕に気付いてくれるかも……と、淡い期待をしていたが、現実には氷の様に冷酷で。

「うわ、こっちくん！ きめえ!!」

梅田は害虫を見る目でにらみ、僕のお腹を蹴った。内臓が飛び出そうなくらい、痛い。だが、なんとか堪え、無我夢中に逃げた。

気がつくとき、窓枠にまで来てしまっていた。もう、床には逃げられない。今度こそ、殺されてしまう。かくなる上は窓の外だが、ここは二階である。クモの糸を使おうにも、糸の出し方など分からない。

僕が迷っている間に、授業が進まない事でいらいらしている先生が僕に近づいてきた。手には、教科書が。僕を落とす気だ！

逃げ場のない細い窓枠で、なすすべもなく僕は、先生の教科書で叩き落とされた。強風に長いこと包まれて、意識が薄れ始めた頃、何処かでグシャツという音が聞こえた。

「ん……」

目を開けると所々汚れた白い天井が見えた。保健室の天井だ。僕、何でこんな所に、とズキズキしている頭でぼーっと考える。

しばらくそうしていると、ガラツと保健室のドアが開いた。入ってきたのは、梅田だ。

そこで、ようやく僕の意識は覚醒し、はっとする。まずい。今、

僕はクモのはずだ。また、梅田に蹴られるかも……。

また『きもい』という言葉を覚悟したが、梅田の口から出てきたのは僕が予想だにしていなかった、一言だった。

「あれ、拓。起きてたんだ」

「え、あ、その……」

「拓、お前な……階段から転げ落ちるなんて、先生から聞いておどろいたよ。ったく」

「あ、あの、蹴らないの……？ それに、拓、って……」

「悪い夢でも見てた？ それか、頭打った？」

「あ、いや、なんでも、ない……」

夢。そう、だったのかな……。確かに、周りの物が大きく見えるような事は無い。手足も日に焼けた僕のもの。ただ、所々痣が出来るだけだ。

「もう部活、始まるぞ。行けそうか？」

「あ、うん。ちょっと頭痛いけど、大丈夫」

「そっか。んじゃ行こうぜ」

廊下に出ると、清水さんがいた。

「あっ……！ たつくん！ 落ちたんだって？ もう大丈夫なの？」

「う……し、清水さん……」

さっきの「夢」のせいで清水さんが少し怖くなったのか。上手く、反応できない。

「んにゃ。拓ったらそこまでひどい怪我じゃなかったんだぜ。まったく、五、六限サボれて羨ましいぜ」

「あ、あはは……」

「あっ、六限って言ったたら大変だったんだよたつくん!!」

清水さんがはっとして僕に言った。

「クモが出てね。たつくんはいないし、怖かったんだから！」

「……………クモ。」

「ああ、あれか。俺んところにも近づいてきてな。思わず蹴っちまっ
たよ」

瞬間、お腹をけられた感覚が蘇ってきた。

「それにしても清水、お前うるさすぎ」

「だって気持ち悪かったんだもん。カサカサ動いてさあ」

「まあ、気持ちは分かるけど……って、あれ、拓どうした？」

俯いている僕に、梅田が気づいた。僕は、二人に訊いた。

「ねえ、二人はそのクモ、気持ち悪いと思った？」

「うん」「当たり前じゃん」

「……………二人はクモが痛そうとか、可哀想とか思わなかった？」

「何で？」「全く」

「二人はさ、もし内臓が飛び出るかと思うくらいの勢いで蹴られた
らどう思う？」

「痛いのはやだ！」「内臓は、流石に無理」

「……………へえ。まあ、そうだよね。」

カサカサカサカサカサカサ

「へ？ あ、ま、また、クモ!? いやああ!!」

清水さんの視線の先を見ると黒くて小さなクモがいた。確か、先
生がハエトリグモとか言っていた。

「うわ、またクモかよ。勘弁してくれ」

「うえええ、きもいきもい!! 寄らないで!!」

「……………」

僕は無言でそのクモに近寄ると、優しく両手で包み込んだ。



画：かんのひろみ

呆気にとられている二人には目もくれず、僕は早足で下駄箱に向かい、外へ出た。

さわさわと雑草が生い茂る草むらに、かがむ。そして僕はゆっくりと、手の中のその小さなクモを放してやった。